

アクティブ・ラーニングは思考を活性化する救世主か！？

中井 弘一

小中学校・高校の学習内容を定める学習指導要領を改定する議論が、中央教育審議会で本格始動した。その注目の一つが、「アクティブ・ラーニング」の充実である。読売新聞朝刊（2月7日付）には次のような説明があった。

アクティブ・ラーニングとは、学習する者が能動的になる学びのことだ。もともとは、大学が学生の学力底上げのため米国から導入した、大学での学びを指す。ペアやグループでの話し合いや作業が多く、一方的な講義に比べて知識・技能の定着や学習意欲の向上に効果的とされる。

小中学校や高校では、アクティブ・ラーニングという言葉が生まれる前から、同様の学びが実践されていた。例えば、各自が解き方を考え、発表し、みんなで考え、最後に各自でもう一度考える授業。「練り上げ授業」と呼ばれる伝統的な指導法で、国際的にも評価が高い。

今、なぜアクティブ・ラーニングという学習形態が注目されるのか。アクティブ・ラーニングは何をねらいとしているのか。現代社会が複雑化するだけでなくその影響の即時性から、これからの時代は、正解が一つの事だけを学ぶのではなく、正解が複数であったり、または正解がなかったりするものを学習することが求められているからであろう。大学教育でも、専門知識の探究から知識基盤社会をたくましく生き抜いていくためのジェネリック・スキルの習得に焦点が移りつつあり、活動的・実践的な学びや学習形態が必要とされている。

アクティブ・ラーニングがねらいとする教育は、「思考を活性化すること」であろう。英語力がグローバル化の必要条件と言われるが、思考力こそ最必要条件である。講義型の授業では、生徒や学生の思考力は活性化しない。さりとして、「演習」などの基礎知識や基礎能力を培う基盤科目は critical mass として一定量の学習が必要である。ジェット機が離陸する際に一定の長さの滑走路を飛翔できるスピードで走行しないと離陸できないことと同じである。学びには input—intake—output の段階がある。与えられた教材を思考して内在化することで、output というプロダクションが生まれる。ただ、この intake（内在化）は目に見えない思考のプロセスであり、学習者は自らの力でこ

の思考過程を経なければならない。それには、自律的でアクティブな学習が必要である。学びには知識面の量的な達成が必要であるが、より深い質的な達成も必要である。基盤となる知識は量が求められるが、思考は質が求められる。

思考は単線型でない。簡単な例で言うと、たとえば、「暖流と寒流では、よい漁場になりやすいのはどちらか」この問いに対し「水に溶ける気体の量は、水の温度が高い場合と低い場合では、どちらが多いか」という問いの答えから最初の問いの解答を導き出せる。お湯を沸かすとやがて気泡が現れてくる。水に溶けていた気体が出て行く。そこから、「冷たい水の方が気体の量は多い」が解答の根拠になる。また、「冷やされた表層の水が対流で下降し、栄養が豊富な海洋深層水が表層に押し上げられ、その栄養を植物プランクトンが利用して繁殖し、同時に動物プランクトンが繁殖するから」と別の根拠を考えることもできる。つまり、複線的に思考することによって真理に近づくことができる。このように知的なやりとりが必要で、それには協働して学ぶことが効果的であろう。

ただ、このアクティブ・ラーニングはそううまくいくものではない。失敗に終わらないようにするためには、米国でまとめられた「7つの原則」の指針が参考になる。教員と生徒（学生）とのコンタクト、生徒（学生）間の協働、能動的な学習、迅速なフィードバック、学習時間の確保、生徒(学生)への高い期待、多様な才能と学習方法の尊重がそこには挙げられている。教員には、過剰介せず生徒(学生)に自学自習を促進させる技量があること、学習目的を的確に伝えること、指導の段取りを充分準備することなどが必要で、生徒(学生)には、独断で決めつけないこと、基礎教養や議論の前提となる知識をしっかりと身につけていること、安易な解答に走らないこと、協働学習のリーダーシップが必要であるなどが求められる。学びに楽はないが、この学習形態は教員と生徒（学生）双方に相応の負担を強いるものである。それが踏み込めない障害となることがある。

大切なことは、「やらされている」という思いでは学びや教育は進展しないということである。学習意欲・指導意欲が前提条件である。知識の量と思考の活性化が意欲に繋がるものであるとするなら、アクティブ・ラーニングは学習形態であって、その起爆剤には、指導者の教員としての魅力・力量が必要なのだろう。やはり「自信」「信頼」「誇り」を持つ指導者が救世主となるのではないだろうか。

■参考文献

山地 弘起(2013)「アクティブ・ラーニングの実質化に向けて」『長崎大学におけるアクティブ・ラーニングの事例 第1集』

「アクティブ・ラーニング 話して動いて学び充実」 読売新聞朝刊 平成27年2月7日(土)

Chickering, A. W., & Gamson, Z. F. (1987) *Seven principles for good practice in undergraduate education*. AAHE Bulletin

(なかい・ひろかず 教授/教員養成センター長)